

## <論文>地域における生涯学習の推進：学校教育と地域の連携の在り方(<特集>地域社会における生涯学習の課題と展望)

著者	小向 敏文
雑誌名	生涯学習研究と実践：北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	4
ページ	51-63
発行年	2003-02-28
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002372/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002372/</a>

## 地域における生涯学習の推進 ～学校教育と地域の連携の在り方～

### The promotion of Lifelong Learning in a Local Area : The Ideal Form of cooperation Between School and District

小 向 敏 文\*

KOMUKAI, Toshihumi

#### I はじめに

これまで、子ども達の発達をめぐって様々な問題が指摘されてきた。例えば、中央教育審議会や教育課程審議会の答申では、ゆとりのない忙しい生活、社会性の不足、規範意識の低下、自立の遅れなどがあげられている。

学校の今日的な課題はこのような子ども達が抱えている諸課題に対応できずに、その社会的機能が十分に発揮できていないところにある。つまり子ども達が学習に意欲的に取り組む意欲を育てることに成功しているとは言えない状況にある。このような状況の克服を図り、子ども達にとって学校が学習と生活の場となるよう再生を図ることが大きな課題であるといえる。

このような課題に対応するためにも、教育課程審議会の答申や新学習指導要領において、学校の教育課程が地域の特色・教育力が生かされるよう繰り返し述べられており、特に「総合的な学習の時間」においては、(1) 地域の特色に応じた学習課題、(2) 自然体験やボランティア活動などの社会体験、見学や調査などの学習活動、(3) 地域の人々の協力を得た指導体制、(4) 地域の教材や学習環境の積極的な活用、などの面で学校が地域の特色や資源・教育力を生かすことが求められている。

#### II 地域素材を生かした学習活動への取り組み

##### 1 地域の特色の把握と地域との連携

総合的な学習の時間が、これまでと全く画一的といわれる学校の授業を改め、「地域や学校、子ども達の実態等に応じて、学校が創意工夫をしながら特色ある教育活動が行える時間」として設けられたことから、地域の人々の協力や地域の教材、学習環境の積極的な活用が一層重視され、学校教育と社会教育の連携がこれまで以上に期待されている。

そのような中で、地域の実情や特色を生かした取り組みを進めるためには、やはり教師や社会教育担当者自身が地域を理解し、地域の素材に気付くことが重要である。地域との連

---

\* 北海道奥尻高等学校

携については、地域の団体や人材との交流、情報交換や意見交換が重要である。さらに、今年度から高等学校において実施されている「学校評議員」の中で、自然や文化、地域の産業や観光、伝統、環境保全などに関する学習を地域と連携して行う上で有効に活用することも方策の一つと考えられる。

私自身も高校で9年間勤務の後、社会教育行政で市町村派遣、道立施設、教育局、本庁勤務等18年間、学校現場では体験できない多くのことを各地域で体験させて頂いた。その中から学校教育に係わる事例として、根室管内の「サケ学習」への取組みについて紹介したい。「サケ学習」への取組みは歴史もあり、「総合的な学習」に対応した地域での学習活動として先進的なものであった。

今年の4月、久しぶりに出身地の高校の現場に戻ったわけであるが、勤務している北海道奥尻高等学校では、周囲が海に囲まれているという離島の特色を生かし、全道の普通科の中で唯一総合的な学習の時間に「スクーバ授業」を実施している。実施にあたっては地元関係機関や団体をはじめ、檜山支庁、海上保安庁など多くの方々の協力を得て進めており、その取組みについて紹介したい。

また、社会教育での取組み事例として、檜山管内社会教育主事会が平成12～13年度にかけてまとめた研究紀要から総合的な学習の時間等についてのアンケート結果と、学校教育と連携した地域での取組みの事例について紹介したい。

### Ⅲ 各地域における実践例と総合学習の可能性

#### 事例1【標津町立薫別小中学校における「サケ学習」の取組み】

##### (1) 「さけ学習」の取組みの変遷

知床半島の東側つけ根に位置する薫別は、明治のはじめから漁業基地として発展し、校区の保護者の多くの職業は漁師で、しかもサケ定置網に従事していることから、「将来を担う漁業者の育成」「豊かな心情の育成」という地域の願いをうけ、「サケの一生（生活サイクル）」を中心に据えた栽培漁業学習として地域の協力のもとに実験学習を多く取り入れスタートした。しかし、地域や漁業環境の変化、環境問題対応などから「栽培漁業」部分を縮小し、「さけ生態・環境」の解明へとシフトしていった。

現在は、次のような基本的な考え方で「サケ学習」への取組みが行われている。

##### ①体験的な活動

体験的な活動は子どもが自主活動を通し、試行錯誤の中で自らが判断、意志決定する学習の場である。これを重視した学習。

##### ②地域の活用

小規模校での地域の自然・人材の活用のあり方を重視した学習。

##### ③子どもの自主的な活動

子どもの自主的な活動は、自由な発想と純粋にやってみたい、学習したいという考えから生まれる。その願いを保証した活動の場を確保した学習。

#### ④連続した学習

時間の枠にとらわれず、常に生活に密着し实际的で連続性のある学習。

[平成14年度サケ学習年間指導計画より]

### (2) 「サケ学習」の取組みについて

#### ①地域社会の状況への変化に対応した取組み

「サケ学習」への取組みは1960年代にはじまり、地元漁業と結びつき、「将来を担う漁業者の育成」や「栽培漁業技術の向上」など、地域の熱い期待や協力を得ながら出発し、実験・実習など体験的な学習に取組み、その活動を支援する地域との連携・協力体制を構築するという「地域社会の教育力の向上への貢献」として評価されている。1980年代に入り、200海里問題や輸入サケの増大による価格の低迷などによりサケを取り巻く漁業環境が変化したことにより、従来の「水産教育」から「地域学習」へと転換が図られている。

#### ②「総合的な学習」としてのサケ学習

総合的な学習は、既存の教科・科目、分野の枠をはずして各領域の知識や技能を総合的に学習できるよう計画された学習活動であることから、「サケ」を学習することは「サケ」を通して自然環境や地域を学習することであり、実施に当たっては地域の関係機関、団体、施設等との連携・協力が不可欠で、地域住民の講師の活用、サーモン科学館との連携などにより活動内容の充実が図られている。また、標津町は山・川・海などの自然が豊かで、産業も漁業の他に酪農も盛んであり、「自然連鎖」を形成していることから「総合的な学習」を地域全体で推進する条件が整っている。海や川を守ることは森林を守ることにつながり、特に魚介類や昆布の生息など漁業と自然環境との関連から水源地の植林運動は有名で、同じ道東の厚岸町でも厚岸湖の水質保全をはじめとする環境問題への取組みのために、町ぐるみで「環境教育推進協議会」を組織し、植林活動や生活排水問題、地域の川・海・湖の水質検査などの取組みが「環境教育」として行われている。

### 事例2【北海道奥尻高等学校における総合的な学習への取組み】

#### (1) はじめに

北海道奥尻高等学校は、昭和50年に北海道江差高等学校の分校として開校し、昭和52年に道立の北海道奥尻高等学校として名称を変更し今日に至っている。奥尻島は離島には珍しい海岸段丘が形成されており、島の中央部には樹木も多くかつて「薪」が暖房用として使われていた。また比較的気候温暖なことから、島の西部を中心に「稲作」も盛んで漁業と共に農業も盛んである。

このような自然に恵まれた環境にある奥尻高等学校は、1学年～3学年まで計5クラス全校生徒82名、教職員20名という小規模校であるが、校訓「創造・自律・実践」のもと、

普通科では全道唯一のスクーバダイビング授業をはじめ、各種資格取得や地域交流授業など個々に応じた特色ある教育活動を展開している。また、毎年卒業生の約7割が進学し、就職も道内外問わず決定しほとんどの卒業生が島を離れている状況である。

## (2) 「総合的な学習」への取り組み

### ①グループ別活動

本校の「総合的な学習」は、「スクーバ活動」と「グループ活動」に分かれている。スクーバ活動のグループ分けについては後ほど述べるが、本年度の「グループ活動」は4つに分かれており「自分たちの地域を研究する」「中国について研究する」「ヨーロッパについて研究する」「自分たちの身体について研究する」という活動内容になっている。

教員の配置については、全教員がいずれかの活動を複数で受け持ち、「スクーバ活動」以外のグループについては、毎年教員スタッフの状況を判断して年度当初に内容を検討している。

### ②無学年制（選択制）

グループの選択に当たっては、学年に関係なく全学年が自由にグループを選択し、人数に偏りがある場合には調整を行っている。学年間の枠を取り外すことで、様々な経験や観点から事象とらえることができるという利点がある。

### ③体験学習（グループ別活動以外）

本校では、グループ別活動の他に、「特別養護老人ホーム訪問」や「幼稚園訪問」、「町議会見学」なども総合的な学習として実施している。いずれの場合も地域との関わりを強く学ぶことができるのと同時に、進路決定に際して大きく影響を受ける生徒もいる。

### ④時間配当（グループ別活動）

スクーバ活動については技術の向上、グループ活動については作業能力の向上をそれぞれ効率的に行うために、2時間連続3日間、6月から9月の4ヶ月にわたって実施している。ただし、最終日については1日日程で実施している。

## (3) 「スクーバ授業」取り組みの経緯と活動内容

本校のスクーバ授業は、平成5年7月の北海道南西沖地震の復興と時を同じくして発足した。「災害後の活力ある学校づくり」を目的として、地域と学校が相互理解深め、「少しでもふるさと奥尻に愛着を持つ生徒を育てたい」という願いがあった。平成6年に道教委の指定事業「特色ある学校づくり推進事業」としてスタートし、平成9年の「いきいきとした魅力ある高校づくり」奨励校へと継続された。学校裁量の時間を利用したグループ体験学習のひとつとして実施し、平成12年度からは「総合的な学習の時間」の中で選択授業として展開されている。

### ①スクーバ活動の特徴

スクーバダイビングは常に危険が伴う専門的な活動のため、本校では函館のダイビ

ングショップよりプロのインストラクターを講師に招き、実技指導と学科指導を行っている。教員の役割としては、スクーバ授業の企画、関係機関等との連絡調整、生徒指導などがある。また、担当教員は生徒と共にダイビングを行い、安全対策に十分配慮している。

## ②スクーバ活動の班分け

今年度は全校生徒82名中35名がスクーバ活動に参加し、3つの班「CカードⅠ班（19名）」「CカードⅡ班（8名）」「レスキュー班（8名）」に分けている。CカードⅠ班は初心者、CカードⅡ班は前年度にCカードⅠ班を経験した生徒、レスキュー班はCカードを取得した生徒（3年生）が所属する。

## ③スクーバダイビングの資格

「Cカード」とは2年間かけて実技と学科の検定に合格すると、スクーバダイビングの団体の一つ「NAUI」が発行する「NAUIオープンウォーターダイバー認定書」のことで、世界共通の初級者ダイバーの認定書である。また、レスキュー班は「NAUIスクーバレスキューダイバー」という資格をとることを目標にし、海難レスキューの基本的な実技・学科講習を行っている。

## ④関係機関等との協力体制

本校スクーバ活動の実施にあたっては、地元の関係機関・団体をはじめ檜山支庁、海上保安庁等多くの方々の支援と協力が不可欠である。具体的には、予算面、人材面の支援等では地元奥尻町役場の水産課、漁港の使用などにあたっては漁業共同組合や地元漁港管理者・同潜水部会、道立水産普及所、その他スクーバ保護者会、ダイビングショップ、交流体験活動に協力していただいている岩手県立種市高等学校など多くの関係者の協力を得ている。

## ⑤年間活動スケジュール

年間計画については次の表のとおりであるが、その中から「行事的」な取組みについて説明する。

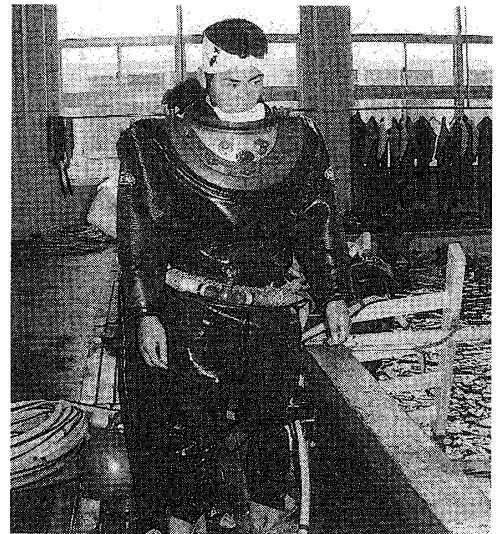
平成14年度 スクーバ活動年間計画

月	日	活 動 内 容
4	18	スクーバ活動説明会（1年生）
	26	「総合」オリエンテーション（希望調査1次）
5	29	「総合」オリエンテーション（希望調査2次）
6	17～19	・総合第1期（限定水域＝プール講習：学科講習①）
7	10～12	・総合第2期（海洋講習①：プール講習：学科講習②）
8	2～5	*交流ダイビング（3年生） 交流相手：岩手県立種市高等学校 海洋開発科
	21～23	・総合第3期（海洋講習②：学科講習③） *23日は「海上保安庁との合同訓練」
9	3～5	・総合第4期（海洋講習③：学科講習④：学科・実技検定試験） *最終日はファンダイビング：1日日程

### ア) 交流ダイビング

3年間スクーバ活動を続け、技術習得を終了した3年生（今年度は7名）を対象に岩手県立種市高等学校との交流を行っている。

種市高等学校海洋開発科では、深度10メートルのプールなどの設備が整っており、ヘルメット式潜水、マスク式潜水の体験を行う。また実習船による海洋でのファンダイビングも行っている。これらの交流活動は本校生徒の自信と成長に大きな役割を果たしている。



### イ) 海上保安庁との合同訓練

二つのメニューで実施している。一つは、「応急処置法」で、ダミーを使って遭難者の発見から、気道の確保、心臓マッサージのやり方等について全校生徒を対象に本校体育館で実施している。二つ目は午後からスクーバ生徒対象に海洋で「水中での緊急時の対処法」を実施している。この訓練は潜水技術の向上と共に生徒が「命の大切さ」を再認識するよい機会となっている。



### ウ) ファンダイビング

スクーバ活動の最終日に、一日日程で実施している。通常の海洋講習では潜ることのない水域までバスで移動し、1年間のまとめとして総合ダイビングを実施している。奥尻の海は、非常に透明度があり貴重な海産物である「ウニ」「あわび」や「油子」「そい」など日本海を代表する魚との出会いなど、感動的な水中での散策を楽しんでいる。



また、前日に実施したCカード・レスキューそれぞれの認定試験の結果発表を行い、合格者の認定式も行っている。終了のころには生徒の表情にも以前にも増して自信が満ちあふれているように見え、1年間の活動の成果を改めて感じ取ることができる。

### 事例3【社会教育での取り組みから～教育資源を生かした学習機会の情報収集と実践～】

#### —各学校の総合的な学習時間との連携—

##### (1) はじめに

我が国の教育は、戦後に国民の教育水準を高め、経済社会の発展の大きな原動力となってきた。しかし、今日の教育の現状を見てみると、様々な問題が発生し、大きな社会問題となっている。

1つ目の問題としては、少子化や都市化の進展、家庭や地域社会の教育力の低下などを背景として、いじめ、不登校、校内暴力、学級崩壊、凶悪な青少年犯罪の続発など深刻な問題に直面していること。

2つ目は、行き過ぎた平等主義による教育の画一化や過度の知識の詰め込みにより、子どもの個性・能力に応じた教育が軽視されていること。

3つ目は、科学技術の急速な発展や経済社会のグローバル化、情報化など社会が著しく変化する中で、従前の教育システムが時代や社会の進展から取り残されつつあること。

こうした教育の現状や課題を踏まえ、教育改革国民会議が行われ、平成12年12月22日に「最終報告」が出されている。

文部科学省では、最終報告の提言を踏まえた教育改革のための具体的な施策や課題を取りまとめた21世紀教育新生プランを策定している。このプランは、新生日本の実現を目指し国政の重要課題の一つに位置づけられる教育改革の今後の取り組みの全体像を示すものとして、学校が良くなる、教育が変わるための具体的な主要施策や課題などが提示されている。

また、学校教育法及び社会教育法の改正や平成14年度からの完全学校週5日制の実施などを背景に、地域で子どもを育てる環境の充実、人間性豊かな青少年の育成等が求められていることから、地域の教育力を活性化させ、奉仕活動や体験活動を充実するための総合的な取り組みが必要となっている。

このような現状と課題を踏まえ、檜山中部地区3町（大成町、熊石町、乙部町）では、2カ年計画で調査やモデル事業に取り組み、研究を進めることとした。

##### (2) 研究内容・方法

###### 1 年次・総合的な学習の時間等の実態調査

- ・家庭教育、学校教育、社会教育の連携の理論研修
- ・学校訪問による懇談等

###### 2 年次・学社融合の立場に立ったモデル事業の展開

- ・まとめ



## (3) 総合的な学習の時間等の実態調査

本調査は、平成12年に教育資源を生かした学習機会の情報収集と実践を主題に、各学校の総合的な学習の時間との連携の在り方を探るため、乙部町、熊石町、大成町の小・中学校18校に対し、総合的な学習の時間に取り組んでいる内容や子ども達の反応、外部指導者の活用、問題点と今後の方向性などについて実態調査を行った。ここではそれらの調査結果及び小学校と地域の人々との交流学习について紹介する。

※紙面の関係から、乙部町、熊石町、大成町の中学校7校のアンケートについて紹介することとした。

## ①調査対象者

小学校調査	・ 乙部町 4校 ・ 熊石町 4校 ・ 大成町 3校
中学校調査	・ 乙部町 4校 ・ 熊石町 2校 ・ 大成町 1校

## ②調査方法・回収率

調査方法 回収率	①調査実施機関 檜山管内社会教育主事会 ②調査方法 町教育委員会の協力を得て実施 ③回収率 100% ④サンプル数 18校
-------------	---

## ③調査項目

調査項目	設問1 総合的な学習の時間に取り組んでいる内容及び時数について 設問2 総合的な学習の時間の児童・生徒の反応について 設問3 外部指導者の活用について 設問4 問題点について 設問5 今後の取り組みについて 設問6 教育委員会への要望について
------	--

※調査結果については、以下の通りである。

## 総合的な学習の時間等についてのアンケート結果

### 1. 対象 乙部町・熊石町・大成町の中学校7校

### 2. 総合的な学習の時間に取り組んでいる内容及び時数

	題 材	内 容	学年	時数	備 考
1	進路学習	職場体験学習を含め、進路指導計画に基づく指導			
	パソコン学習	パソコンの使い方、情報の集め方など			
	講話集会	地域の方々から行き方等について話をしてもらう	1	35	
	地域学習	通学路植樹、空瓶回収、郷土料理など	2	70	
	郷土芸能伝承学習	三鹿獅子舞の伝承学習	3	70	
	特養老人ホーム訪問	福祉について考える			
2	伝えよう我が町乙部	産業、歴史、文化、自然の分野からもっと乙部の町を調べ親しみを深める	1	35	
	福祉とボランティア	高齢者福祉、児童福祉、障害者福祉の体験学習とまとめ学習へ展開	2	35	
	職場体験学習	職場体験学習を通して働くことの喜び、苦勞、生きがいなどを知り、自分の将来や進路を主体的に選択できる力をつける	3	35	
3	特養ホーム訪問	芸能発表と、おみやげ製作	全	8	
	リサイクル活動	空瓶、牛乳パック、古新聞回収	全	8	
	生産・体験学習	農作物や草花の栽培活動	全	6	
4	自分らしさ発見	自らの興味・関心に基づく課題解決学習	全	35	
5	ブルーオーシャンタイム	地域の浜辺を檜山一にするための調査や作業	全	10	
	職業調べ学習	地域にある事業所や職場の内容について調べ、発表する	1	15	
	職業体験学習	地域にある職場で一日体験をし、発表する	2	14	
	福祉体験学習	車いす体験等の体験から老人福祉について調べる	3	7	
6	郷土の自然、歴史	地域の歴史や自然について調べ登山活動をする	全	12	
	郷土芸能	地域の伝統芸能を学び発表する	全	16	
	ボランティア	ボランティアの体験学習を取り入れ校区の一人暮らしのお年寄り宅を訪問する	全	8	
7	職場体験学習	町内各企業にて職場体験の学習	3	20	
	祖父母世代と語る	地域の祖父母世代と語り、生活を考える	2	4	
	父母に学ぶ	親や身近な人々と語り進路を考える	1	4	
	環境教育	町内清掃活動を通して環境を考える	全	2	
	国際理解	留学生との交流	1	2	
	交通安全	啓発マラソン、パレード	全	8	

#### ■ 分析

- ・ふるさと関連のテーマ設定をしたところでは広範囲に総合的にアプローチするゆえ、多くの時間をさくことになったと考えられる。
- ・職業学習、自分発見、福祉、環境ボランティア等、今日的課題の取組が見られる。

### 3. 総合的な学習の時間の児童・生徒の反応どうですか。あてはまるものに○をつけて下さい。

- 大変意欲的である (1)
- 意欲的である (6)
- 特に変化はない (0)
- 意欲的ではない (0)
- その他 (0)

## 4. 総合的な学習の時間等で外部指導者について、(1) から (3) の設問にお答え下さい。

(1)、現在、外部の指導者を採用していますか。

- 1 いる (4)  
2 いない (3)

(2)、(1) でいると答えた学校では、どのような人材を活用していますか。

指 導 内 容	指導者の職業(差し支えがなければお書き下さい。)
職場体験学習	地域各職場
講話集会の講師	地域住民
伝統芸能伝承	地域保存会
登山	地域の愛好会
地域を語る講師	元議員、社会福祉協議会
祖父母世代と語る会	地域高齢者

(3)、今後、外部指導者は必要ですか。該当するのに○をつけて下さい。

- 1 必要である (7)  
2 必要ない (0)  
3 その他 (0)

(4)、(3) で必要であると答えた学校のみ、どのような人材が必要ですか。

専門的職業の方  
題材によって一時的な専門指導者が必要  
それぞれの分野で特技を持っている方  
特定のスポーツの指導者  
活動内容に詳しい地域の人材  
学習内容の専門的な知識や技能のある方

## ■ 分析

- ・外部指導者の需要がある。
- ・現在、主として地域に根ざした地元の方を講師として呼んでいる。
- ・専門性を一層強く求める傾向がある。

## 5. 今年度総合的な学習の時間を実施して問題点がありましたらお聞かせ下さい。

目的やどんな力をつけたいのかははっきりさせなければならない  
予算的な保障ができない  
時間の確保  
課題の設定を生徒主体にしているが、難しい面がある  
設備、指導者の面で生徒のニーズに応えきれない  
予算がないため、活動内容に制限がある  
計画した時数より多くなってしまった  
関係機関との連携をもっと密に行う必要がある  
外部指導者の職種によって、時間設定が難しかった  
地域の教育素材の掘り起こし

## ■ 分析

- ・予算を含めた諸般の調整の困難を感じている。
- ・校外の様々な活動や人について知ることの努力が学校に見られる。
- ・総合的な学習の指導方法を学校は探っている段階にあると考えられる。

6. 総合的な学習の時間で来年度以降取り組みたいことがありましたらお書き下さい。

新しいことより、現在ある指導計画を実践、反省し改善を加えていく。  
 今年度の継続  
 職場体験活動  
 地域の自然、歴史、文化等の調べ学習  
 漁業体験  
 水産加工体験  
 幅の広い職場体験

■ 分析

- ・地域産業の漁業をテーマに据えるなど、足元からふるさとを捉えようとしている。
- ・単年度完結とならず、さらに発展的にテーマ設定をしていこうとするものも見られる。

7. 教育委員会に要望することについてあてはまるものに○をつけて下さい。(複数可)

- |   |                        |     |
|---|------------------------|-----|
| 1 | 予算的な援助                 | (7) |
| 2 | 外部指導者の紹介               | (2) |
| 3 | 校外へ移動する場合などの輸送         | (6) |
| 4 | 社会教育施設の開放              | (2) |
| 5 | 社会教育事業への児童・生徒の参加       | (0) |
| 6 | 総合的な学習の時間に合った社会教育事業の企画 | (1) |
| 7 | その他                    | (0) |

社会教育事業との連携を考えた場合、年度当初の教育課程編成前に連携を図る必要がある。

■ 分析

- ・予算的な面での支援を教育委員会に強く求める姿が見られる。
- ・講師等の情報は自前で探ろうとしている。

## 【乙部町での取組み事例】

## 1 事業名

昔の遊び交流と絵本の読み聞かせ（館浦地域学級と乙部小学校の連携）

## 2 事業内容

乙部町では各地域（12地区）で主に女性が主体となり生涯学習の一環として地域学級に取り組んでいる。

その学級の一つ館浦地域学級では、今年度乙部町教育委員会で重点課題でもある「地域ぐるみの教育」活動として、今まで学習してきたお手玉遊びをはじめとする昔の遊びと、現在の子どもの活字離れ、読書離れ等が叫ばれている現状から、それらを改善していくために絵本の読み聞かせを学習して、子ども達と交流を図っていききたいという計画を立て実践してきた。

乙部小学校では、地域に開かれた学校、生きる力の育成、総合的な学習の時間の導入などにより、学校教育のパートナーとして社会教育の機能を有効的に活用する観点から、あらゆる場面において学校教育と社会教育が連携した取組みが実践されているが、今回2年生の総合的な学習の時間で「昔の遊び体験」で指導してくれる方を求めている。

これらのことから、館浦地域学級で学習していることと、乙部小学校2学年の総合的な学習の時間を学社融合の事業として取り組むこととした。

3 期 日 平成14年2月6日（水）

4 会 場 乙部町立乙部小学校第2学年教室

5 時 間 総合的な学習の時間3・4時間目

6 当日の流れ

活 動 項 目	内 容	備 考
①自校紹介	10名の自己紹介	今回は小学校2年ということで、絵本ではなく紙芝居とした。
②絵本（紙芝居）の読み聞かせ	紙芝居の実践生 「したきりすずめ」 「さるかにばなし」	
③昔の遊び交流 休 憩	お手玉の遊び方とグループ指導  休憩中もお手玉で遊ぶ姿が見られました	

④昔の乙部についての交流	児童からの質問等に答える	児童からの質問 ・ 昔の乙部の様子 ・ 昔の食べ物 ・ 昔の学校のこと など
⑤小学生によるお礼の言葉	学級代表によるお礼の言葉	
⑥お礼の器楽演奏	児童全員による器楽演奏	※児童の真剣な挨拶や 心のこもった演奏を 聴いて「感激しまし た」「またやりたい」 という声がたくさん でていました。

## 7 成果と課題

取組みの前は「小学校の授業として指導するのは無理である。」という雰囲気が大勢をしめ、実施に向けて戸惑う場面も見られたが、実際に行ってみると児童とのふれあいや、子どもの真剣な顔や喜ぶ姿に感激し、今後もこのような活動を継続して行いたいという意欲が出てきたと同時に、団体の活性化に向けての効果が大きいと期待できると思われる。

普段、街で交流した児童と出会ったときに、互いに声を掛け合うようになったということから、青少年の健全育成においても効果的な事業であった。

また、専門的な分野の指導者や学習の成果を分かち合う学習ボランティアを発掘、養成するなど、人材養成・活用事業としての効果にもつながるとともに、学校と地域の人が交流することによって、学校教育と社会教育の双方にプラス効果があったのではないと思われる。

今後、さらにこのような取組みを充実させていくために、学校に出向き教職員との意見交換等をしながら連携を密にしていかなければならない。

## 引用・参考文献

- 1) 高嶋幸男・野呂幸夫「サケ学習をどうつくるか」『子どもと地域』  
(北海道教育大学教科教育研究図書編集委員会編) 東京書籍. 1999
- 2) 平成12～13年度研究紀要「檜山」檜山管内社会教育主事会編